

「初期被ばく」対応の現実と 広域避難計画への課題

～いま、あらためて振り返る原発事故避難～

2019年

9月1日（日）13:00～16:00

茨城大学理学部インタビュースタジオ
（水戸市文京2-1-1）*会場にご注意ください

福島原発事故から8年半が経過するなかで、事故後の対応については様々な検証が行われてきました。ただし、当時の原子力防災計画がどのように機能し、機能しなかったのかについての検証についてはいまだ不十分な点が多い状況です。実際に避難を余儀なくされた方がどのような状況に遭遇したのかについて当事者の声を聞き、また原子力防災計画や被ばく防護という視点から取材や検証を続けてきた東京新聞記者や市民団体の講演から、改めて福島原発事故における事故対応の課題について議論を深めます。

これらの議論をもとに、茨城県ならびに14市町村にて進められている原子力防災計画・広域避難計画に向けて、どのような提言が得られるのか参加者とともに考えます。

プログラム

進行 蓮井誠一郎（人文社会科学部・教授）

開会の挨拶

講演

1. 「あらためて振り返る原発事故避難」 菅野みずえさん（浪江町住民）
2. 「初期被ばく取材から見えてきたこと」 榊原崇仁さん（東京新聞記者）
3. 「原子力防災・広域避難計画の課題」 満田夏花さん（国際環境NGO FoE Japan）
阪上武さん（原子力規制を監視する市民の会）

コメント

原口弥生（人文社会科学部・教授）

ディスカッション

閉会の挨拶

主催：茨城大学人文社会科学部 市民共創教育研究センター

共催：国際環境NGO FoE Japan

日本平和学会「3・11」プロジェクト

参加申込

当日参加も可能ですが、資料準備のため下記のサイトから事前申込していただくと
助かります。→ <https://kokucheese.com/event/index/571606/>

問合せ

上記サイト経由、あるいは人文社会科学部 原口研究室 029-228-8427（留守電・FAXあり）

原発事故避難者の経験

東京電力福島第一原発事故発災後、放射性ヨウ素による甲状腺被ばくは、なぜ測定されなかったのでしょうか。当時の「福島県緊急被ばく医療活動マニュアル」に従えば、避難時の検査で13,000cpm（甲状腺等価線量最大100mSv相当）以上の人たちは、甲状腺被ばく測定や安定ヨウ素剤の服用指示など必要な措置を受けるはずでした。また、記録にも残されるはずでした。

しかし、避難時の混乱の中で、スクリーニングレベルは10万cpmに引き上げられたばかりか、甲状腺測定は行われず、記録もほとんど残されませんでした。後に甲状腺がんを発症した方も、当時の記録がなく、自らの被ばく量を医療機関などに説明することができませんでした。

浪江町津島から避難された方は、3月15日、避難途中の郡山総合体育館でスクリーニングを受けました。そのとき、測定器の針が振り切れ、10万cpm以上でしたが、名前もきかれず、記録にも残されませんでした。

今の原子力防災計画では、個人の被ばく線量は測定されないことになっています。私たちは、原子力防災計画に何を求めるのか問われています。

榊原崇仁さん

・東京新聞記者。2013年8月から特報部。以後、福島原発事故の初期被ばく問題の取材を続ける。19年1月～3月の連載「背信の果て」を担当。「被災地の子どもで100mSv」という非公表の推計などを報じる。

満田夏花さん・阪上武さん

・福島原発事故後の事故対応や放射能汚染・被ばくや福島県民健康調査のあり方、各地の原発の防災計画の実効性や被ばく防護措置の検証など、さまざまな角度から調査、政策提言を行っている。

会場入口は
駐車場側のみ

会場 理学部
インタビュースタジオ
*人文棟ではありません



学内案内図

正門

*本企画は、JSPS科研費16K12367の助成を受け実施しています。



交通アクセス

JR水戸駅（北口）バスターミナル7番乗り場から茨城交通バス「茨大行（栄町経由）」に乗車します。乗車時間は約25分です。大学には駐車場がありますが、数に限りがありますので、お越しの際はなるべく公共交通機関をご利用ください。